

異文化理解の困難さについて — 結核を巡る言説の多様さを巡って —

福田 真人

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

1. 異文化理解とは

1.1 前提

異文化とはそもそも何か。まず自分の文化がある。ひとつの文化がある、と言ってもよい。それに対して別の人種、民族、国家に属する文化があるとする。それが異文化であろう。その最低ふたつの異なる、あるいは相反する文化があって初めて異文化と言える。そして、そこに相互理解が必要な時に、異文化理解という言葉が用いられる。

しかし、まず自分（自国）の文化を理解していることが前提である。そして他者（他国）の文化を見て一種の比較を試みることになる。

日本は、歴史開闢以来、何度も外来文化の影響を受け、それを咀嚼して、今日の姿にまで立ち至った。とりわけ、隣国の中国と朝鮮から受けた文化的影響の度合いは計り知れないものがある。文字は言うにおよばず、宗教、文物まで実に幅広い恩恵を被った。

しかし、中国の文字（漢字、ひら仮名、カタカナ）を受容したにもかかわらず、文法的影響は皆無に近かった。根幹を残し、外皮を借りたのである。このことは、その他の事象においても特に注意して評価されねばならないことであろう。

やがて日本は、別の異国と接することになる。それは、鉄砲と基督教を到来した南蛮文化と称されるポルトガル（葡萄牙）やオランダ（阿蘭陀）との通商による文化・文物の摂取である。

そして言わずと知れた、幕末・明治期の諸外国との接触も、日本に歴大な文物と思想をもたらした。日本は、文明開化、和魂洋才を標榜し、富国強兵、殖産興業に努めた。最後の黒船は、第二次世界大戦（太平洋戦争）の敗戦によって、実際西欧諸国の占領をもたらした、文化・生活の確実な西洋化である。これをアメリカナイゼーションと一括して語る人もあろう。

1.2 情報の確かさ

こうした歴史的変化、文化的環境の変化が、日本にもたらしたものは何だったのか。そ

の評価はさておき、ここでは「異文化」と称されるものが、ただちに異文化であるのか、時にそうしたものが、すでに自国の文化に内包されていることがある、という事例を紹介しつつ、異文化理解、コミュニケーションの困難さを示してみたい。

われわれは学校で、微分・積分はライプニッツ(Gottfried Wilhelm von Leibniz, 1646-1716)が1684年に微分積分法を発表し、ニュートン(Isaac Newton, 1642-1727)は1666年に着想し、1687年に『プリンピキア』で発表していると習っている。

しかし、高名な江戸の和算家である関孝和(1642-1708)を思い出してみよう。

関孝和は関流の始祖として、算聖と崇められた。明治以後、和算が西洋数学にとって代わられた後も、日本数学史上の英雄的人物とされた。ニュートン、ライプニッツより少し前に、微分・積分の「一步手前」までたどり着いたことで世界的にも評価されている。

彼はそれまでの算木による代数学を大幅に改良、記号を使う筆算式の数学を独自に編み出した。それは現代の代数学と同じ方程式の書き方(記号法)に通じるものであり、これによって和算は飛躍的な発展をみた。

彼はまず連立二元一次方程式の解を求める公式を生みだし、これを多元に広げて行く過程で今日の行列式の考えにたどりついたのである。これはヨーロッパに先立つこと200年である。さらにn次方程式の近似的な解を求める方法を考案したが、これは関に約100年遅れてイギリスのホーナー(William George Horner, 1786-1837)が1819年発表した方法と同じである。また円に内接する正多角形の辺の長さを求める公式(角術)を得てこれをホーナーの方法を使って解き11桁まで正しい円周率を計算している。

ニュートンと同時代に日本でもこのような高度な数学が確立されていたことに驚かざるを得ないが、あまりにも実用一点張りだったために滅びたと考えられている。和算のねらいは実用と計算術そのものにあつた。ためにそこから進んで数や図形、さらにニュートンのように運動の本質や法則を追究しなかったのである。自然科学の基礎とならなかつたうらみがある。

あるいはこのような事象が、他の文化事象でも生じていないだろうか。つまり、遠くから到来したと思われている事象が、実はもっとも身近なところにもあつたという。あたかもメーテルリンクの「青い鳥」のような事象が。

そのもっとも顕著な例が、意外なところで見られる。その一例が、結核にまつわるイメージの問題であろう。奇異に映るかも知れないが、異国からのイメージが明治日本を彩つたと考えられてきたが、実のところ日本にすでに同様のイメージがあつたのであり、このような意外な側面で、文化は深く根を下ろし、かつ影響力を行使しているのである。

以下、その伝播と影響の深さ、また自国の文化の正しい把握と理解の困難さについて述べてみよう。

2. 結核のロマン化での検証

2.1 問題の所在

長い間、日本では結核（労咳、肺病、肺患、伝屍病）⁽¹⁾は美人の病、天才の病と考えられてきた。

いつ、どこで、誰がこのように言い始めたのか不明だが、「佳人薄命」説や「肺病天才」説は、多くの人々の口にのぼっていた。

しかし、一体全体、こうした命題は正しいのだろうか。確かに、作家や俳人の樋口一葉、石川啄木、正岡子規、堀辰雄、福永武彦、画家の青木繁、佐伯祐三、音楽家の滝廉太郎などが結核に苦しみながら、すばらしい創作活動に従事した。森鷗外も夏目漱石自身も、その周辺にも無数の結核患者がいたことを考えると、明治日本は結核の天才たちに彩られていたと言っても過言ではないだろう。たとえば戦争と政治的解決という観点では、日清戦争(1894-95)の下関条約、日露戦争(1904-05)のポーツマス条約という戦争終結の会議の日本側代表であった陸奥宗光、小村寿太郎が共に結核で斃れている。

そうした中で、結核美人説や、結核天才説は、明治維新以降、西洋の文化的影響のもと、とりわけデュマ・フィス作の『椿姫』によって形成されたと思われていたが、実際にはすでに江戸時代に、独自の甘いイメージが形成されていた。

江戸時代の労咳患者のイメージとは、簡単に言って貴人、富裕の人、その子女の病というイメージで、また若い人に特に多いというものであった。

こうしたイメージは、西洋での結核ロマン化と酷似しており、またそうしたイメージが中国や韓国、インドにも見られる一種の文化を越えた現象であることが知られる。また、それは今を遡ること2500年のギリシャの医聖ヒポクラテスや8世紀の中国唐にも見られることなのだが、結核患者の特徴としての大きな眼の中に光を宿しているという記述が語ることに目を向ける必要がある。

明治は、そうした富裕階級の娘、勉学に秀でた秀才の病、というイメージを、「佳人薄命」「天才肺病」に変えた。美人という新しいイメージが結核という病に付加されたのである。

美人と言えば、中国の楊貴妃、西施、日本の小野小町が思い出されるが、誰も結核で死んでいない。それが、結核美人の、細く力なげで、首が長く、眼が大きく、頬が紅い、咳き込み、赤い鮮血がハンカチに飛ぶというイメージが付与されたのである。

健康美人が称揚される今日と対蹠的な美人像が構築されたのである。

2.2 明治期の肺病のロマン化

長い間、日本での結核は幕末から明治維新时期に西欧から輸入された文学的感興の影響によって、ひどく甘美で特殊なイメージに染められたと考えられてきた。

その嚆矢となったのは、フランスのデュマ・フィス(Alexandre Dumas fils, 1824-95)が書いた『椿姫』(*La Dame aux camélias*, 1848)の翻案・翻訳である。

もともとこの小説は、デュマ・フィスが愛人関係にあった女優マリィ・プレシス(Marie Duplessis, Alphonsine Plessis 1824-1847)が、その人気のさなかに結核で死んだことを悼んで作られた作品で、巷間の紅涙を絞った作品であった。フランスで小説として評判を取ったのみならず、それは劇化され、またイタリアのヴェルディ(Giuseppe Fortunino Francesco Verdi, 1813-1901)によって『ラ・トラヴィアータ』(*La Traviata*, 1853)としてオペラ化され、人口に膾炙した。「道を外した女」の意味)

西洋の文物を摂取するに忙しかった明治期日本は、ヨーロッパの文化をとにかく輸入し、翻訳した。『椿姫』もその例外ではなかった。最初に新聞や雑誌に翻案の形で、また次に部分訳が、そしてそれが全訳につながった。以下に簡単に記せば、このような経過で日本に紹介されたと言ってよいだろう。

『巴里情話／椿の俤』 草廼戸主人訳 [函右日報・明治17年] (1884)

『椿の花把』 加藤紫芳訳 [春陽堂 明治22年] (1889)

『椿夫人』 内田魯庵訳 [世界之日本・明治29年] (1896)

『椿姫』 長田秋涛訳 [早稲田大学出版部・明治35年] (1902)

『脚本/椿姫』 田口掬汀訳 [文芸倶楽部・明治44年] (1911)

『椿御前』 太田三次郎 訳 [春陽堂・大正3年] (1914)

演劇に関しては、明治44年(1911)松居松翁が翻案して『椿姫』というタイトルで帝劇で上演され、これまた好評を博した。また、このオペラ『ラ・トラヴィアータ』が日本初演された大正7年(1918)には、すでに演劇の『椿姫』が人口に膾炙していたので、そのままのタイトルで催行された。この上演は赤坂ローヤル館で行われ、小松玉巖訳の日本語で歌われたが、原語のイタリア語上演は大正8年(1919)の第1回ロシア歌劇団を嚆矢とする。

こうした一連の『椿姫』像が、つまり若く美しい女性が、世間の絶賛を浴びながら、肺病(結核)で夭折(早世、夭逝)することが、肺病患者の運命のように日本の人々に印象付けられ、それが西洋からのイメージの輸入であると堅く信じられるに至ったのである。

かてて加えて、肺病で夭折する女流画家マリー・バシュキルツェフ(Maria Bashkirtseff, 1858-1884)の日記が日本でも広く読まれ、鷗外も同様に肺患で逝った樋口一葉(1872-96)の作品とともに称揚している。

しかし実際には、明治以前、まだ日本が西洋からの結核に関する独特のイメージを受容する以前に、もっと幅広いイメージが世間に普及し、それが庶民の間でいわば固定化され

ていたのではなかったか。

次の節では、そうした江戸期における労咳、肺病、結核のイメージについて分析、考察してみることにしよう。

もちろん、明治期の日本で最初に結核、肺病を大がかりに取り上げたのは広津柳浪の小説『残菊』（明治22年、1898）であり、その後結核小説の白眉を成したのは徳富蘆花の新聞連載小説『不如帰』（明治31年、1898）である。

2.3 江戸期の労咳のロマン化

江戸時代にどれほど労咳（肺病、結核）が流行していたかは、確かな統計書類がないのでなんとも言えない。たとえば飛騨地方のある寺院の記録（須田圭三『飛騨0寺院過去帳の研究』）があるが、その中での労咳の記述がどれほど正確であるか不明である。確かに呼吸器系の疾患は区別できるかもしれないが、それが統計上の意味ある数値とはならない。

また元禄5年(1692)に刊行された『女重宝記』では、若い人の病であることが明記されているのみならず、その症状も詳しい。

しかし、世間によく知られた「振袖火事」と呼ばれた「明暦の大火」（明暦3年、1657）⁽²⁾では、お宮参りの道すがらふと出会った小坊主に恋い焦がれた大店の娘が、ついに労咳で死に、その振袖が古着屋に売られて、それがまた別の大店の娘に渡って、再び、三度と亡くなり、供養のために江戸本郷本妙寺で焼かれる際に、一陣の火となって江戸を燃やし、実に10万人以上の犠牲者を出したというのである。

別の医学書にも、ご典医の薬箱を通して、その薬箱の所持者に労咳が伝染したということが書かれているから、この振袖火事にも労咳伝染の底意があったのかも知れない。西洋と同様、日本でも長い間結核の伝染説と遺伝説が医学者の論議の的であったので、このいささか教訓めいた話は、伝染説に与するものだったのかもしれない。

こうした巷間の噂話にかたて加えて、当時の庶民の感情を如実に映し出したものに短詩型文学としての川柳がある。川柳は、元来口語が主体であり、季語や切れの制限もなく、字余りや句跨りの破調、自由律も見られる。俳句とともに連歌を源として、付け句からあらかじめ用意された七七を省略して五七五としたもので、江戸時代の前句師・柄井川柳（1718-1790）が選んだ句の中から、呉陵軒可有（ごりょうけんあるべし、-1788）が選出して『誹風柳多留』（はいふうやなぎだる）を刊行し盛んになったことから、「川柳」という名前と呼ばれるようになった。

3 川柳に映し出された労咳の姿

3.1 大店の娘

川柳でなによりも目を引くのは、裕福な家庭の子女である。大概裕福な商家の娘であろう、すでに「振袖火事」の言い伝えにその姿が垣間見える。

振袖は、婚姻前の女性が着る着物で、袖が長い。しかし、高価なものであるから、一般庶民にはおいそれと手の出る品物ではなかった。色鮮やかな振袖を着ている女性をやっかむ心理もあったのであろう、金持ちの病に対する独特の歪んだ心理が窺える。

深窓の令嬢の病、恋の病であると庶民が労咳を認定したところにこれら川柳の面白さがあるとと言ってもよい。

「労咳は忍び返しの中で病み」

「労咳は大振袖の病なり」

「恋やみは金持ちの子の病なり」

「振袖を着あきて四火の沙汰となり」

「忍び返し」とは、大きな屋敷の塀の上に備え付けられた、外部から容易に侵入できないように塀や門の上に竹・木・金属製の先の尖った野外防犯グッズの装置である。しかし、恋は誰にでもあることだが、その恋を病んで死に至るとは金持ちの特権だったのか。ここで注意を要するのは、金持ちということは書かれているが、美人とはどこにも書かれていないことである。そこに明治と時代を分ける意味づけの差異がある。

振袖を着飽きるほど着たということは、娘時代が長く、お嫁の行きてがなかった、つまり器量悪しということであろうか。お灸と禅式呼吸法が治療法しかなかった時代を反映して、すぐ背中のお灸のつぼ「四火」あるいは「四花」へ治療を施したのである。

「婿のとりようが遅いと名医云ひ」

「振袖をぬがせてすへるむごい事」

「箱入りを十九で桶に入れかえる」

婿取りが遅いと、娘は欲求不満になって労咳を病むということであるが、それしか名医の診断がないいうところに面白みがある。振袖脱がせて饅えるのは灸であり、灸の熱さもさることながら、立ち上る煙の臭いもまた鼻を衝いたであろう。

箱入娘を棺桶に入れる年が19歳というのは、昔女の厄年が19と決まっていたからである。

「お労咳かと天蓋星をさし」

「亭主が有つての労咳さじをなげ」

こうして19歳で若死にした女性を寺に葬ることになる。当然その前には葬式がある。葬式では天蓋、つまり葬儀のテントが張られる。この天蓋が死んだ娘の振袖を解いて作ったところ、たまたま火が燃え移り、それが江戸の街を巻き込む大火となったのが「振袖火事」である。葬式の準備が整い、夜に入っていよいよ天蓋が吹きやまない風に棚引いているのであろう。

しかし、労咳は娘だけの病ではなかった。本来、伝染病であったのだから、誰でも感染するものである。亭主のある女房もついに罹った。亭主があつて、性的欲求不満もないはずなのに、どうして罹ったのだろうかと言師は訝しげである。

3.2 秀才の立場

それでは、労咳は女だけの罹る病かというところではない。次に男の罹る姿を川柳で追ってみよう。川柳の労咳患者を見る目は、一時もゆるやかな視線を許さない。

「子の曰くといつては咳をせき」

「労咳の母は近所のどらをほめ」

江戸時代はなお漢学の時代であった。『孟子』、『孔子』、『論語』、『大学』などの中国の学問書であった四書五経を素読し、訓読し、訓詁することこそ学問の真髄であった。

当然のごとく、秀才の青年は漢学者の下に弟子入りし、漢文素読に精を出した。それこそ『孟子』や『孔子』の中で頻出する「子曰く」の表現は、勉学に精励する青少年をさまざま想起させる。

しかし、このような努力が、労咳という病気によって蹉跌を迎えることとなった場合に、当時の医者ほどのような治療を施しえたのか、はなはだ心もとないものがある。

「男の労咳五丁でなほす也」

「息子の労咳は白い猫がよし」

「黒猫と小判息子ながめてる」

医者の見立ては、女性の労咳と同じで欲求不満であった。欲求不満の解消には、手っ取り早く女を与えるに限るとした処方になされたことが分かる。

なぜなら「五丁」とは、遊廓吉原のことであり、「白い猫」とは「白猫＝白拍子＝遊女」と読めるのである。つまり、欲求不満解消こそ治療法のすべてであると当時の人々は考えていたということであろう。

労咳すなわち肺病の患者は、身边に黒猫を飼うと全快するという俗信がありました。「青白い娘のそばに黒い猫」という川柳があり、また「飼い猫が黒ければ娘は良縁にこと欠かない」とも言われていた。そのうえ、俗信として「黒猫」が労咳によいという考え方は、あたかも疱瘡（天然痘）に古来赤い色がよいというので、赤い服、布団、蚊帳、襦袢、ご飯を準備したということであるから、あながち笑い飛ばせない。

「傾城四五ふくで息子快気する」

「聖人と息子このごろ仲たがい」

「四書を払い吉原大全を買ひ」

ついに事態は進展して、労咳に苦しんでいた秀才も「傾城」＝「美人」を4，5人相手にして回復したというのである。かつて勉学に親しんでいた勉強家も、ついには孟子や孔子といった聖人と仲違いするようになり、四書五経を売り払って、吉原の案内書に手を出す始末である。

また江戸時代の俳諧書『俳諧武玉川』には、次のような句があつて、江戸の時代には労咳はなかなか印象深い病気であったことが分かる。「とにかく色のわるひ惣領」とは、総領（＝長男）はとかく大事にされすぎて、身体も弱く病気がちだったことを示しているであろう。「不食の給仕飛石を行」とは、離れで病に伏せて食事しない患者に、飛び石伝いに病人食を運ぶ様であろうか。

また「病上りうつくし過てうそらしき」とあるのは、病気が人間を美しくさえ見せることがあるということであろうか。芥川龍之介に「癆咳の頬美しや冬帽子」（昭和2年）という句がある。西洋で喧伝された蒼い肌に微熱のために頬がぼっと紅い「死の希望」（*spes moribunnda*）とでも呼ぶべきものが、人の注意を惹いたのかもしれない。しかし、その一方で「世界を蔵へ入れる労咳」と詠まれているように、世間での歓びや哀しみを一切押し殺してしまう死病としての労咳もまた確かに意識されていたのである。俳人尾崎放哉の「咳をしても一人」（大正14年）には、そうした孤独が如実に反映されていると言えよう。

3.2 江戸期労咳のまとめ

ここでもう一度江戸期の労咳全体を川柳の中に見てみよう。

- (1) 女は金持ちの箱入娘が、欲求不満で労咳になること。しかし、振袖着た娘が美人とは規定していない。
- (2) 男は、勤勉と秀才が労咳になるとしている。

(3) 欲求不満解消が最良の療法として、恋愛を許すこと、娘には婿取りを、息子には吉原遊女を勧めている。

(4) 女は恋と結婚、男は吉原：つまり労咳という病はいつもどこかで愛が絡む問題との認識を人々が持っていて、それを金持ちへの当てこすりや揶揄として表現されたと考えられる。(一種の逆差別的言説。宮澤賢治も、富裕な農家の肺病患者として差別された。)

4. まとめ：異文化理解のための教訓

江戸時代に労咳は、庶民の生活にも目立つほどの病気であった。蒼ざめ、痩せ細り、血を吐いて死んでいった(咯血)。しかし、同時にこの病が特別の意味を帯びていたことも事実である。いわく富裕層の病、秀才の病、つまり庶民の中で目立っていたというだけではなく、もっと特別の病気でもあるという認識である。

そこには金があり、才能がある人へのやっかみやいわく言い難い憧憬の気持ちや嫉妬の念が含まれていた可能性が高い。

しかし、幕末維新を経て明治時代になると、一気に入ってきた舶来の文化文明が、また日本人の好みや趣味に新しい意味を与えた。その一例が『椿姫』に代表される肺病患者への独特の意味づけであろう。

とにもかくにも、日本文化の中にある一見西洋的な香りを放っているものを、再度検討してみる必要がある。すでに数学における微分・積分に関して、それが江戸時代の和算学者関孝和によってまったく別個に大部分同じ発想が検討され、証明されつつあったということ述べた。

それが、もっと大きな文化事象として結核の流行とそれに付随した佳人薄命、結核天才説のイメージにも起こっていた可能性がある。明治維新以降の西洋文学の影響と考えられていた甘美な結核患者のイメージは、実ははるか以前の江戸時代において、金持ちと秀才の病気であったことが分かった。すでに特別な意味づけが行われていたということである。

しかし、このような文化事象は数限りなくあるに違いない。

たとえばもっと突飛とも思われる事象について最後に述べておこう。それは薔薇の問題である。薔薇は英国の象徴のようでもあり、またヨーロッパの貴婦人を表象するのに最も相応しい花のように思われてきた。実際、英国王室のダイアナ王妃がパリで事故死した時に行われた国葬では、「英国の薔薇」と称えられた。まさに薔薇が英国産であると堅く信じられているからである。

確かに薔薇は、ヨーロッパからアジアまで広く野生で存在したが、そこに日本のハマナスがかけられて今日のような大輪になったことは意外と知られていない。同様に、フルーツとしてのオレンジも、元来は南アジア産で、アラビアを經由して地中海に運ばれ、そこ

で重要な果物として栽培されるに至ったのである。

こうした問題は、すぐさま異文化理解の困難さを想起させる。ある民族、国家に独特と思われていたものが、必ずしもそうでない場合があるということである。こうした文化事象の再検証は、新しい文化史の領域開拓になるが、また同時に自国の文化の正当な（必ずしも正統ではないかも知れないが）評価をもたらすに違いない。それは、自国文化の正当な評価の困難さを示していると共に、また他国の文化の正しい評価、受容の困難さをも示しているのである。

文化研究、異文化研究の意義は、なお今後いっそう重要性を増すであろう。そこにこそ初めて円滑な意思疎通が行われ、異文化理解が進むのである。

注

1) 結核。慢性伝染病で、結核菌を原因とする疾病。その名称は時代と共に「労咳」－「肺病」－「結核」と大きく変化した。英語でも同様に[phthisis]-[consumption]-[tuberculosis]の用語の変化が見られる。本論で、こうした用語が用いられるのは、その時代の使用用語に近付けようとしたためである。

2) 明暦3年1月18日（1657年3月2日）から1月20日（3月4日）にかけて、当時の江戸の十分の一ほどを焼失するに至った大火災。振袖火事・丸山火事とも呼ばれる。上野の神商・大増屋十右衛門の娘・おきくは恋の病に臥せったまま承応4年（明暦元年）1月16日（1655年2月22日）、16歳で死亡。寺では法事が済むと、振袖を古着屋へ売り払われ、その振袖は本郷元町の麴屋吉兵衛の娘・お花の手に渡り、翌明暦2年1月16日（1656年2月11日）に死亡。再び古着屋の手を経て、麻布の質屋・伊勢屋五兵衛の娘・おたつのもとに渡って明暦3年1月16日（1657年2月28日）に死亡。因縁の振り袖を本妙寺で供養するため和尚が読経しながら振袖を火の中に投げ込んだ瞬間、一陣の風によって振袖が舞い上がって本堂に飛び込み、それが燃え広がって江戸中が大火となったという。

参考文献

須田圭三（1973）『飛騨0 寺院過去帳の研究』須田圭三個人出版

福田真人（1995）『結核の文化史：近代日本の病のイメージ』名古屋大学出版会

福田真人（2001）『結核という文化』中央公論新社

Rene Dubos(1952) *The White Plague: Tuberculosis, Man, and Society*, Little & Brown Co.

Mark Harriossn(2004) *Disease and the Modern World: 1500 To the Present Day*, Themes in History, Polity Press.

Henry Sigerist(1945) *Civilization and Disease*, Cornell University Press.